

Long-Term Outcomes After Total Pancreatectomy: Special Reference to Survivors' Living Conditions and Quality of Life

渡邊, 雄介

<https://hdl.handle.net/2324/1654702>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



氏 名： 渡邊 雄介

論 文 名： Long-Term Outcomes After Total Pancreatectomy: Special Reference to Survivors' Living Conditions and Quality of Life

(膵全摘術後の長期成績：特に生存患者の生活状況および生活の質に注目して)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

近年、膵全摘術の安全性が報告されているが、膵全摘術における適切な患者選択基準についてはまだ確立されていない。膵全摘術後患者は膵機能不全に対し生涯にわたり自己管理による治療を要するため、膵全摘術の手術適応は疾患因子のみならず患者の社会的背景をも考慮し慎重に決定する必要がある。本研究の目的は、膵全摘術後生存患者の生活状況や生活の質 (quality of life, QoL) を含めた長期成績を明らかにすることである。1990 年から 2013 年までに膵全摘術を行った連続する 44 例の患者について後ろ向きにデータを集積した。また 25 例の術後生存患者に対し横断的に臨床的調査を行い、Short Form 36v2 を用いて QoL に関する質問を行った。膵全摘術後の合併症発生率および死亡率は、それぞれ 32%と 5%であった。術後合併症を若年患者 (70 歳未満, 14%) に比較し高齢患者 (70 歳以上, 48%) で多く認めたが ($P = 0.02$)、死亡率、術後在院日数、生存率に差を認めなかった。25 例の術後生存患者のうち 24 例 (96%) は膵性糖尿病に対する自己血糖管理を行っており、グリコヘモグロビン値の中央値は 7.4%であった。3 分の 1 の膵全摘術後患者に下痢を認め、下痢を訴える患者の QoL 値は下痢を認めない患者と比較し低かったが、膵全摘術後の QoL 値は、国民標準と同等であった。膵全摘術は高齢患者でも安全に施行可能である。患者の自己管理能力が保たれていれば、膵全摘術後の QoL は維持されると思われる。